

地域コミュニティの 防災力

重川 希志依

連載 第6回

参加型訓練でコミュニティを見直す



重川 希志依

私たちが取りくんでいる「災害や防災」という言葉にはどうしても堅苦しいイメージが付きまとい、市民にとっても決して取り組みやすいテーマとは言えません。そこでこのような課題を解決する一つの試みとして、地図を使った災害図上訓練DIG (Disaster Imagination Game) や防災まち歩きなど、参加者全員が頭や身体を使いながら災害に強いまちづくりを考えて行くワークショップが各地で開催されるようになってきました。

“災害図上訓練DIG”は自衛隊や消防などで用いられていた図上訓練の方式を応用したもので、参加者が一枚の地図を使って道路や鉄道、公共施設の所在、災害時に危険な場所や避難所・病院など防災資源となり得る場所を書き込んだりしながら、災害が発生したときにどのような状況に陥るのか、救援活動はどうするのかなどをイメージトレーニングすることが可能となります。「住んでいる場所のことは分かっているつもりでいたけれど、いざ地図を使って自分のまちを眺めてみると、改めて自分が住んでいるまちの状況が良く理解できた」という声が参加者から寄せられることもあり、防災対策をわが家わが町で考えてみようという次のステップにつながっていく可能性が大きく、防災研修の場で積極的に活用されるようになって来ました。

また“防災まち歩き”では、参加者が自分たちの住む地域を歩きながら、危険な場所や防災資源などをチェックし、地域の現状を認識するというもので、歩いてみて分かった結果を地図

地域コミュニティの 防災力

重川 希志依

上に書き入れて地域の防災マップを作ってみることも可能です。「防災」という視点で改めて自分たちの住む地域を見てみると、これまで気に留めてきたこともなかった消火栓のある場所を認識したり、危険なブロック塀の存在に気がつく事もあり、「気づき」のきっかけを与えてくれる機会ともなります。

これらの訓連や研修の最大のメリットは、「一方的に人の話を聞くだけ、傍観者として見ているだけ」ではなく、自ら参加する事によって当事者意識が芽生えてくる点にあるといえます。さらに、同じ地図を眺めながら参加者全員で議論しあったり、同じ視点を持って自分達の住む地域を歩いてみることにより、参加者がお互い顔見知りの関係となり、希薄であった地域のコミュニティを再び活性化させるきっかけとなり得る点も大きなメリットの一つと言えるでしょう。地域の中で顔見知りの人ができることにより、いざ災害が起こった時に強力な助っ人となってくれる仲間が身近にできるのは、訓練の大きな成果の一つでもあります。

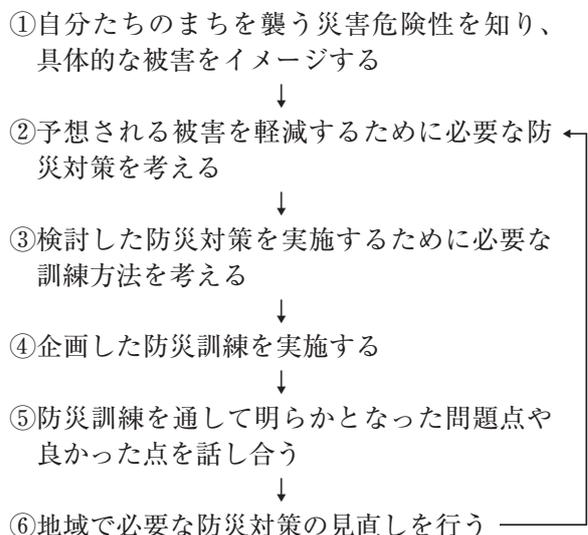
一方、災害図上訓練にしても、防災まち歩き訓練にしても、参加者の防災意識が高まってくにつれて、総論から各論へと議論が移っていくこととなります。総論を話題にしているうちは和気あいあいと話し合えていても、個別具体の各論になれば、それぞれの利害が対立してくることもあり得ます。この家のブロック塀は危険だ、この家は無接道で消防車も入れないというように、個人のお宅の危険性に気づいた場合、それを表立って指摘することによって参加者の関係がギクシャクしてしまうこともあるのです。

このような問題を起こさないためには、漠然と住民を集めてワークショップを開くのではな

くて、最初から訓練の目標、着地点をはっきりと定めた訓練を企画することが必要となります。

私の手元に「やってみよう!! 発災対応型防災訓練 ((財)市民防災研究所編著、東京消防庁監修)」という小冊子があります。副題として、～防災マップづくりからオリジナル防災訓練へ～と書かれています。この小冊子で紹介されているのは、住民が作った防災マップの成果をさらに活用して、地域の危険性を考慮した防災訓練のプログラムを考え、皆でその訓練を行うというものです。まち歩きをし、地域の危険性を把握するだけではなく、いざという時に地域の被害を最小限に押さえられるような訓練を考え実行するという点で、これまでの住民参加型のワークショップと比べ、さらに一歩進んだ内容と言えるのではないのでしょうか。

「災害時の被害を軽減する」という明確な目標を参加者が持つことによって、目的意識をしっかり定めてまち歩きをし、防災マップをつくらることができるようになります。住民が主体となって企画実施する訓練のながれは次のように示されています。



地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

この研修の流れを見ていただくと分かる通り、防災まちあるきは一度限りのイベントで終わるのではなく、繰り返して開催し、問題点を発見して具体的な防災対策を実行して行くことが重要な訓練目標になると考えられます。たとえば、①～⑥の流れで、次のような訓練の企画を立てることができます。

- ①道路幅員は狭く、老朽化した木造住宅が密集している。火災の危険性が高くしかも消防車の侵入不可能な場所が多いことが地域が抱える課題である。
- ②火災発生時には消防力は当てにできない。自分たちの力で初期消火をしなければならない。
- ③地震時で断水したことを前提に、住民による消火訓練を企画する。
- ④各家庭や地域にある消火用水や消火器具を利用した消火訓練を実施する。

- ⑤井戸やプールなど消火に使える水の存在を住民が知らないという問題点があることが明らかになった。
- ⑥消火用に使える水の存在を調べ住民の間で情報共有する。

図上訓練やまち歩きなどワークショップ形式の防災研修は、単発的なイベントに終わらせてしまうと、その効果も中途半端になってしまうおそれがあります。回を重ねるごとに参加者の防災に対する知識のレベルもそろい、防災意識も高まっていくでしょう。総論賛成・各論反対で個別の利害が対立しても、対立し合う意見の中から、私を超えて、安全な地域環境を生み出すためになすべきことを見出すプロセスを体験することは、参加者の問題解決能力を高めるために大きく役立つものと思われます。